

「都構想反対!」、わが家の顛末記

松森俊尚

「私たちは、大阪市廃止の都構想に反対します!」

先日いつものように近くの公園で体操をしていたところ、「お父さん（という呼称で）今度は前のときに張っていた看板はつけないんですか」と、犬の散歩をしていた女性から声を掛けられました。

5年前の都構想の賛否を問う住民投票のときに、わが家の玄関前の壁に「反対の意思を手書きした看板」を掲げていたのですが、今回はどうするのかと聞かれたのです。「何か邪魔されたり言われたりしたんですか?」と、真顔で心配もしていただきました。

5年前を振り返ると、確かにわが家の前に政治的意見を表明する手作りの看板を掲げることは、集会や交渉の場や学習会で発言するのとは違った、いやそれ以上に大きな緊張と不安を覚えたものでした。隣近所の人たちがいったいどんな目でそれを読み、何を感じ、私たち家族と付き合うことになるのか、また通りすがりの人たちの反応もまったく想像もつかないことでした。

結果は、これまで何十年もの間互いの生活を見知っていながら「政治の問題」について一言も触れたことのない人たちと立ち話をしたり、通りすがりに看板を見た初めて会った人と言葉を交わしたりと、なかなか興味深い日々を経験することができました。

今回、維新の会は5年前に僅差とはいえ決着のついた住民投票をまたもや力づくで押し付けてきました。まるで「勝つまでジャンケンを続ける」、わがままいっぱいのかかん坊の子供じみたやり口です。政党としての威厳も誠実さも微塵ありません。相手にするのも馬鹿らしいというのが本音なのですが、さりとてそんな「ムチャ」がまかり通って大阪市がつぶされてはたまったものではないので、大阪市の経済と、文化と、伝統を守り、子どもたちの未来を守るために、行動を起こすしかありません。

今回も家族会議を開いて話し合いました。さすがに一度経験したことでもあり、娘たちも「いつ話すのかと思うてん」と、すでに心の準備をしていたようで、すんなり抗議の掲示板を張り出すことが決まりました。

「維新のことやから、また住民投票を言い出すかもしれへん」と先を読んで準備をしていたのではもちろんなのですが、たまたま物入れの隅に残っていた前回の看板を取り出して、まさかこんなことになるうとは、その裏に新たな「私たちの言葉」を書き込みました。

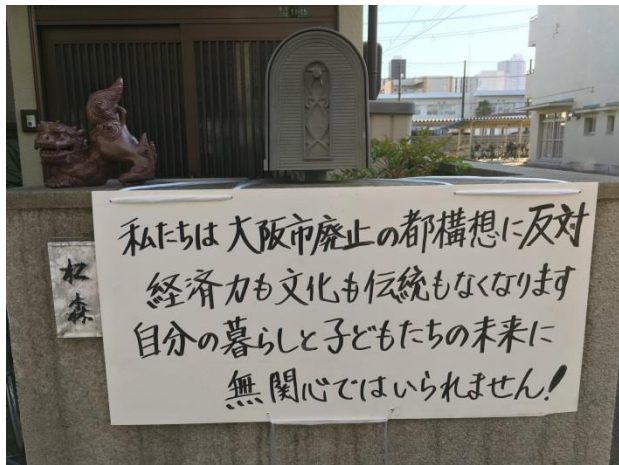
書くのは妻。「えんぴつで下書きするか?」と聞く私に、「面倒やからこのまま書くわ」とやおら太いマジックを取り出して看板に向かいます。横で鉛筆を握ってそわそわ見つめる私の不安をよそに、キュッキュッと心地よい音を残して、またたく間に書き上げました。

10月12日「住民投票告示」の日、わが家の玄関に出来上がった看板を設置しました。さっそく手押し車を押したおばあさんが近づいて時間をかけて読んでいます。その姿を見た通りすがりの男性がその横に並んで目を通していました。わが家を訪れる人たちとの会話も進みます。

昨日、体操をしていると「松森さん」と声が聞こえて振り返ると、例の女性が初めて私の名前を呼んで、「看板、ありがとうございます。とってもよくわかります。人通りの多いところだから、みんなに読んでほしいですね。私もいろんな人に話しかけて、大阪市を廃止することのまちがいや維新のおかしさを伝えています。ドキドキするけどね。いま言わんと、取り返しのつかないことになるから」と話します。私も名前を訪ねて初めて「Aさん」と呼びました。公園を散歩する犬の名前は全部憶えているのに、飼い主の名前を初めて知りました、妙なことで

すが。Aさんとの「出会い直し」でした。

秋風が涼しさを運んでくる季節となりましたが、しばらくは「私たちは、大阪市を廃止する都構想に反対します！」と訴えて暑い日々を送ることになりそうです。



やりました！！「大阪市を廃止する都構想」が否決され、大阪市の存続が決まりました。

それにしても逆転につぐ逆転を繰り返す開票速報の数字に、一喜一憂しながらテレビ画面にくぎ付けになりました。数字が変わるたびに、ため息を漏らしたり、「ヨシッ」と声を出してこぶしを握ったり、妻と二人で「これ心臓に悪いわ」などとボヤキも入れながら見続けます。区ごとに表示される票数を見て、「〇〇区なにしてんねん」「〇〇区よう頑張ってるな」などと、今更どうにもならないことまで口走る始末。

10時過ぎには「賛成」が着実に票を伸ばし、その差がひろがることに。1万票ひらいてしまったところで、いても立ってもおられず、気を紛らすために台所に立ってシンクに残った食器を洗い始めました。横目でぞくテレビ画面の数字が票差が少し縮まったり、また開いたりしながら開票率だけが進んで行き、「ダメかな？」と弱気ものぞいてしまいます。

「あれ、これ何かな？」と、妻の間の抜けた声に振り替えると、「反対が賛成を上回ることが確実に」とのテロップが流れ、「反対票が賛成票を上回り、都構想が否決されることが確実にとなりました」と、NHKアナウンサーの熱のこもった声が繰り返します。

狐につままれたような、にわかに信じがたい気分で、テロップの文字を何度も追いました。家族で握手を交わしたものの、まだ不安がよぎり、握る手にも力が入りません。しかし時間を追うごとに差が縮まり、反対票が上回り、何度か小差の逆転を繰り返しながら、反対票が伸びていきました。

ホテルに陣取った会見場で、維新の松井市長、吉村知事、公明党の府連代表の記者会見とな

り、あっさりと「負け」を認めた敗北宣言を聞いて漸く、「反対」が勝利したんだ、「これで大阪市の存続が決まった」と実感したところです。同時にポピュリズム政治の終焉の一步が、大阪の地ではじまった。安倍晋三の辞任に続く維新の会の敗北は、確実に日本の政治を変えて行くはずだとの思いが浮かびました。

5年前と比べて、コロナの影響で大きな集会やデモが行われなかったのですが、意志を持った一人ひとりの市民が街頭でビラを配り、各家にポスティングしたり、主体的に立ち上がった手作りの運動であったことをひしひしと感じました。私など、身の回りで動くだけで何ほどのこともできなかったのですが、その運動の端っこにつながって活動できたことが本当にうれしかった。



「大阪市を廃止する都構想反対！」の手書きの看板を掲げて、色々な人との出会いと経験がありました。

近寄ってまじまじと読む人、通勤途中急ぎ足のさ中に一瞥をくれる人、自転車に乗りながら視線で追う人、集団登校の子どもたち、通学する中学生や高校生も何かしら興味深げな視線を送っているようにも見えました。

近所の創価学会員の女性が近寄ってきて「これ絶対反対やで！」と力を込めました。わが家を訪れる人との立ち話も生まれます。「5年前には賛成したけど、2回やるのはおかしいわ。今度は反対や」と、初老の男性。子連れの若い母親は「大阪市が無くなるのは心配です」と不安を漏らす。

ドアホンが鳴って妻が出ると、玄関先に立った見ず知らずの女性が、新聞折り込みのチラシや、街頭で手渡されたビラを見せながら、「お宅は看板を出したはるので聞いてみようと思って。

私も反対の気持ちを示したいのですが、このビラを玄関に張っても大丈夫なんですかね」と聞かれます。妻が「大丈夫ですよ、いっしょに反対しましょう。大阪市が無くなったら困るもんね」と答えると、「初めてで不安もあるけど、張ってみます」と明るい返事を残して帰られたそうです。

丁度住民投票当日の朝、私がいつものように体操している公園で小学6年生（と言っていました）の子ども達、男女7人が遊んでいました。しばらくすると集まってボソボソと話しはじめます。「今日は住民投票の日や」ちょっと詳しく一人が口火を切ると、「都構想反対と書いた看板を出している家があるやろ」と声があがり、「知ってる知ってる、角の家やな」と続きます。「その看板の前で、賛成とか反対とか言い合っている人がおったで」と盛り上がります。

すぐ近くで大きな呼吸音を立てながらいかがわしい体操をしているおっちゃん（おじいちゃんか？）が、その屋の家人であることをもちろん知らないで（多分？）。

子どもたちが看板を気に掛けて、中には読んでくれている人たちがいることを知ってとてもうれしくなりました。教室でちょっとした噂、話題になっていたりしたら面白いけれど、と想像も広げてみました。

開票結果が出た後は、向かいのベランダから「よかったね」と声がかかったり、「どないなるかと思ってドキドキしたわ」「大阪市が残ったね」などと、話を交わしました。

住民投票後の思いを道行く人たちに送る必要があるのではないかと、はたと思い立ちました。決して図に乗ったのではない（と自分では思っています）。2回に渡る住民投票で、私たちが考えたことを市民に伝えたいと思ったのです。前のめりの私の気分を察したのか、抑え気味に語る娘たちの「空気」も感じながら、家族で言葉を確かめました。

「大阪市の存続が決まりました！
あきらめなくてよかった。

二度までも市民に分断をもたらした“維新”の責任は重い。
私たち市民は政治に無関心ではいけないと思います！」

今度は物置の隅から、以前ポスターを張っていた黄色いボードを引っ張り出して、もちろん妻が太マジックを力強く走らせて書き上げました。

